

|             |                                                |
|-------------|------------------------------------------------|
| 氏 名         | 姫 野 純 也<br>ひめ の じゅん や                          |
| 学 位 の 種 類   | 医 学 博 士                                        |
| 学 位 記 番 号   | 論 医 博 第 178 号                                  |
| 学位授与の日付     | 昭 和 40 年 3 月 23 日                              |
| 学位授与の要件     | 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当                        |
| 学 位 論 文 題 目 | 松果体部と身体生殖器との関係について<br>(雄ラットにおけるアルミナクリーム局所注入実験) |
| 論文調査委員      | (主 査)<br>教 授 荒 木 千 里 教 授 木 村 忠 司 教 授 伊 藤 鉄 夫   |

### 論 文 内 容 の 要 旨

早発性身体が松果体腫瘍、間脳部腫瘍の一症候群として来ることがあることは一般によく知られているが、松果体そのものが性成熟と関連を有する内分泌器官であるか、或いは生理的に意義を有しない単なる退化乃至は遺残器官に過ぎないか、その機能に関しては未だ明らかでない点がある。

この問題に関しては京大外科教室において、すでに松果体の破壊或いは完全剔出等一連の動物実験が行なわれその成績が発表されているが、松果体そのものは内分泌器官とは考えられないと指摘している。

著者は松果体を破壊または剔出することなく、松果体部を直接その表面からアルミナクリームで持続的に刺激した場合、いかなる影響が身体生殖器に現われるかその間の消息を調べるため、幼若雄ラットを用いて実験を行なった。

実験には生後4～5週6群18例の雄ラットを用い、12例に手術、6例を対照として同一条件下に術後4週間飼育した。各群は同腹である。別に2例(生後5週)を術後6および13週間飼育した。

手術は骨形成的開頭術の後、アルミナクリームを浸透させたスポンゼル片をもって松果体部を蔽い、硬脳膜、骨片を旧に復し創を閉じた。

4週間飼育群は手術群と対照群とについて体重、睪丸、副睪丸、精嚢の重量測定および睪丸、副睪丸、精嚢、副腎の組織学的検索を行なった。6および13週間飼育例は対照はないが体重、睪丸の重量測定並びに睪丸、副睪丸、精嚢、副腎の組織学的検索を行なった。その結果手術群が対照群に比しその発育が特に促進或いは抑制されていると思われるような変化は、認められなかった。

また手術群の脳組織の検索では松果体付近の組織の損傷はほとんどなく身体生殖器の発育に関連があるかもしれない視床、視床下部、脳幹部等にも変化はなかった。

これらのことから松果体そのものは身体生殖器の発育と特に関係ある内分泌器官とは考えられないとの結論を得た。

## 論文審査の結果の要旨

松果体腫瘍で性早熟をきたすことが知られているので、この問題解明の為京大外科教室で松果体の破壊または完全剔除実験を多数行なってきたがはっきりした成績が得られなかった。それで著者は松果体部の慢性刺激の条件下では性機能になにか変化がおこるかを実験したのである。

生後4～5週の雄ラットを用い、手術的に松果体を露出し、アルミナクリームを浸透させたスポンゼル片をもって松果体をおおい、これを4週、6週、13週留置して、それによる体重、睪丸、副睪丸、精囊、副腎の重量測定および組織学的検査を行なった。

なにか変化がでないかと随分苦心してなんかいも実験をくりかえしたが、ついに特別な変化を見出すことはできなかった。これからみると松果体およびその付近の脳組織はやはり身体生殖器の發育または機能に関係ないもののようである。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。